ISSN 0919-4657

KONC

関西自然保護機構会誌

Bulletin of Kansai Organization for Nature Conservation

23巻2号（通算42号）



シンポジウム●世界遺産・春日山原始林の特異性

2001年12月
関西自然保護機構

表紙の言葉

「ルリセンチコガネ」　　写真・文　井手　泉

ルリセンチコガネは，センチコガネ科に属するオオセンチコガネ（*Geotrupes auratus* Motschulsky）の地方変異である。オオセンチコガネは日本全土のほか，朝鮮半島，中国北東部，シベリヤなどにも分布し，体長は20ミリ前後，体色は赤，緑，青緑，青，藍，紫と，かなり変異に富み強い金属光沢がある。その中で青緑～藍～藍紫の色相のグループがルリセンチコガネ（*G.a.ruri*）と呼ばれ，奈良市春日山以南の紀伊半島一帯の，主として山地に生息している。なお，これとは別種のセンチコガネは体つきが似ているが，やや小形で色ツヤとも地味なので，見分けるのはむずかしくない。

ところで，春日山・奈良公園一帯には名物のシカが1000頭あまり生息し，それらの一年間の脱糞量は250トンを優にこえるといわれている。そんな大量の糞を人知れずひそかに掃除してくれているのが食糞性コガネムシ（ふん虫）である。それだけにこの地域はふん虫の種類，個体数ともに多く，これまでに41種が記録されている。その中でとり分け大形で非常に美しく，ふん処理能力も格別にすぐれているのが，このルリセンチコガネである。彼らはふん塊を引きずって，たちまち土中に埋めてしまうことは良く知られているが，生態の詳しい点については，地中生活の部分が大きいため未だ不明なことも多い。

さて，写真は若草山頂で撮ったもので，遠景の山は御蓋山と春日山の一部と高円山である。若草山頂は四方がよく開けているので，この虫のルリ色がとても明るく見え，春日山の原始林のなかで見る色合いや輝きとは一味違う趣きがある。開けた山頂では，虫の背面全体を空の明るい光が隈なく照らすためである。この時も，やわらかい薄日の中で虫の体が青々と冴え，見る向きによって変化する幻色の階調も鮮やかに見えた。それが余りに綺麗なので，寝そべって一心に写した。

ルリセンチコガネの中でも春日山個体群の体色は，おおむね他処のものよりも彩度が高く，光沢も強いものが多いようである。また，深い藍色に紫色の光沢を帯びる美麗個体も多く見受けられる。とにかくそれらを見るたびに，こんな美しいものがいて良いものだろうかと驚くことが多い。思うに，彼らは鹿ふんを分解することによって，奈良公園の生態系と景観を蔭で支えているだけでなく，彼らの美しい姿そのものが，名勝の景観に直接に生彩を添えていることも知ってほしい。

口絵写真に寄せて

「春日山の春」　　写真・文　菅沼　孝之

世界遺産に登録された奈良市のほぼ中央を占める特別天然記念物春日山原始林は，標高497.96 mの花山のおもに西斜面に広がる。春日山原始林の西方には南側に春日大社の境内にはいる標高296 mの御蓋山が，北側には標高341.83 mの若草山が懐に抱かれるように連なり，違った相観を展開する。市内から展望できる斜面は，春日山原始林のほとんどはコジイ林，御蓋山はナギ林，若草山はススキやシバの草原植生で，おのおのに特徴をもっている。

御蓋山のナギ林は季節によって緑に濃い薄いはあるが，春日山のコジイ林の花期はお見事というほかない。コジイの開花に先だつ早春のヤマザクラの開花も捨てたものではない。若草山は四季おりおりに様相を変え，人為的であるにしても，冬の夜空を焦がす山焼きの行事は，ススキの生育と広がりに関連するので，今年の燃え方はどうだろうかと気になるところである。

口絵写真はいずれも2001年5月16日に若草山の頂上から撮影したもので，上の写真は特別天然記念物春日山原始林の主要部を，下の写真は上の写真の右端から鍵型に西に続く春日大社境内の御蓋山で，春日山とのつながりの部分には開花したコジイがみられるが，写真の中央部分のスギ植栽地を除く西側斜面には純林状のナギ林が分布し，山肌に変化は少ない。





2001年5月　菅沼孝之　撮影